

## 介護行動に起因する高齢者夫妻世帯の 生活時間構造変動の分析

藤 原 眞 砂  
高 橋 翔 太

はじめに

1. 用いられたデータの収集法について
2. 抽出された分析対象のサンプル数および復元された世帯データ数
3. 分析枠組および生活時間分析手法
  - (1)分析枠組
  - (2)生活時間分析手法
4. 老老平穏夫妻世帯と老老介護夫妻世帯の生活時間構造の分析
  - (1)時刻別行為者率アプローチによる分析
  - (2)平均時間アプローチによる分析
5. 老老平穏夫妻世帯と老老介護夫妻世帯の生活時間構造の分析に伴う政策的含意
6. 本研究から得られた今後の研究の方向性に対する示唆

はじめに

2009年（平成21年）の日本人の平均寿命は男性79.59歳（世界5位）、女性86.44歳（同1位）と4年連続で過去最高を更新した。65歳まで生存する確率は男性で86.7%、女性で93.6%、90歳になっても男性22.2%、女性46.4%が生存するとされる（厚生労働省 2010）。戦後の長い平和と豊かな経済社会の実現、保健・医療の技術の向上により、わが国の平均寿命の伸長は実現した。この果実である長い老後の多くの自由時間をどのように楽しみ、自己の充実のために用いるかという観点から、長寿の生活の光の部分に焦点を当てた報道、論説も期待されて然るべきである。

しかし、三角形の人口ピラミッドを人口構成の前提に賦課方式で運営されてきた日本の年金システムが、少子高齢社会のもとで成立するのかという疑念、年金基金を運営する社会保険庁の一連の不祥事、さらに現今の経済の停滞などが伴い、国民の将来に対する不安が払拭されていない。加えて、昨今は、東京都足立区での111歳の老人の遺体の発見を皮切りに、100歳以上の所在不明の高齢者、「名ばかり高齢者」がいることも相次いで発覚した。

これを契機に、法務省は全国の市区町村に対し、戸籍に現住所の記載がない100歳以上の高齢者の調査を要請した。その結果、当該の全戸籍の9割にあたる約4,743万件のうち、23万4,354人が所在不明になっていることが分かった（法務省 2010）。高齢者をとりまく家族の人間関係の複雑さ、年金に依存する扶養家族の経済基盤の危うさなど、高齢者を扶

養する家族機能の弱体化の問題が社会的に大きくクローズアップされた。

また、家族関係のない高齢者が、人間関係が希薄な状態で人知れず亡くなるケースにも社会的関心が集まっている。彼／彼女らの孤独死は「無縁死」と呼称され、その数が2008年度では32,000人にも達したとされる。2030年には生涯未婚の人たちの割合が男性の3分の1（34.0%）、女性の4分の1（24.6%）に達するとされる<sup>1)</sup>。家族を形成しない人々の増大により、孤独死の問題は一層深刻化すると喧伝されている（NHK 2010a, 2010b）。

本研究が扱うのも、そのような高齢社会が直面する影の側面に関係している。「老老介護」という重い課題である。「老老介護」とは、「老人を介護する介護者もまた老人である状態」（吉田 2008: 32）と定義される。老老介護のよくあるケースは、介護する側と介護される側が親子関係であったり、親と嫁という関係であったりする場合である。また、夫妻間の老老介護も冒頭に述べたような男女の長寿化、団塊の世代の高齢化に伴い、今後ますます増大するであろう。

老老介護の問題に関係して、吉田春樹は人の寿命を「健康寿命」と「自然寿命」に分けている。健康寿命とは、生存に必要な食料などの調達が可能で一人での生活、要するに自立可能な生活を送ることができる年齢の長さをいう。他方、自然寿命とは、通常の生命の「寿命」の期間のことである。健康寿命を終えたあと、自然寿命が尽きるまでの間、自立が不可能な生活段階を人は一定期間過ごすことになる。この端境の時期を吉田は、人生の「晩秋期」と呼んでいる（吉田 2008: 28-30）。

吉田はこれに関連して、自立した生活が不可能となった晩秋期の高齢者に、特別養護老人ホームや養護老人ホームなどの施設による介護ではなく、精神的支援が可能な在宅での介護が理想であるとする。プロや家族の支援を受けながらも、最後まで自立して在宅で生活することが可能な、センサーを含む情報通信ネットワークで看視された介護モデルを構想している（吉田 2008: 76-92）。

晩秋期の高齢者がいかに質の高い生活を実現するかという問題は高齢社会論の核心に関係する問題であるが、われわれがここで試みるのは、生活時間研究者の立場からの介護への接近である。

生活時間研究は24時間の刻々の日記帳に記された被調査者の行動をもとに、生活の特徴や法則性を見出そうとするものである。それは1日の人間の行動を網羅的に捉えようとするもので、（1）人間の生存に不可欠な睡眠、食事、身の回りの用事（トイレ、入浴など）、（2）組織、社会を支える仕事、家庭を支える広義の家事、学齢期の児童、生徒、学生などの学習（将来、家事や仕事に算入する準備としての学校での学び行動）、それに（3）テレビ、ラジオ、新聞などの読書といった在宅の余暇活動、スポーツ、交際などの外での余暇活動などの諸行動に項目分けされている。「介護」は家事、育児、買い物とともに家庭を支える広義の家事に包摂される行動として位置づけられている。

一般に「介護」というと、被介護者の身体的機能を支援する言葉として用いられている。被介護者の居宅のそうじ、買い物の代行、食べものの用意、給食の支援、着替えの手伝い、入浴の手助け、オムツの取り替えなど、介護には無数の仕事がある。

本研究では老老介護、それも今後増大すると考えられる夫妻間の老老介護に焦点を当て、これを統計面から考察する。「介護」の行動を中心に、晩秋期に入った夫を健康寿命期にある健康な妻が、あるいは晩秋期の妻を健康寿命期の夫がいかに介護するかを考察し、夫

妻間の老老介護の特徴を探ることとする。そして高齢者夫妻間の介護に関係しての政策的含意をそこから抽出する。

これまで生活時間研究において高齢者夫妻間の介護に関係したデータが作成され、分析されたことはなかったから、本研究は国内外の既存の生活時間研究を渉猟した上で、それらに新たな知見を加えるという論考の形式はとっていない。ここでの考察は、新たに集計・作成されたデータをもとに、独自に事実発見を試みるものである。

## 1. 用いられたデータの収集法について

本研究は、総務省が2001年に実施した「社会生活基本調査」のうち、調査票Aで収集されたデータを用いる<sup>2)</sup>。「社会生活基本調査」は国勢調査区からまず調査区を抽出し、さらに調査区から調査世帯を抽出する層化二段抽出法によって行われている。調査票A調査では6,104地区を対象に、71,657世帯が抽出され、10歳以上の世帯員186,424人が対象となった。彼らの生活行動は、連続した2日間の行動を記録する日記帳形式の調査票に記録された。したがって、その2倍の372,848件のデータが収集されている。日曜日から土曜日までの全曜日のデータが取得可能なように10月13日から10月21日までの9日間のうち、調査区ごとに指定した連続する2日間について調査がなされた。調査は留め置き法で、調査員が調査日の前に調査票を配布し、2日間の調査日後にそれを回収するという手続きをとっている。

## 2. 抽出された分析対象のサンプル数および復元された世帯データ数

本研究は総務省統計局に目的外利用申請を行い取得した372,848件のデータを活用した。1件のデータは一個人のデータである。1人当たりの情報は1,370の文字で記されている。したがって、データは372,848行1,370列の規模である。すべての個人が世帯から切り離されたデータである。

本研究は夫妻いずれかが65歳以上の高齢者夫妻世帯を、老老介護（夫妻）世帯あるいは健全な老老平穏（夫妻）世帯に分割し、両者を比較考量し、両者の特徴を、とりわけ老老介護世帯に焦点を当て、事実発見を試みるものである。したがって、世帯単位の分析が不可欠である。このため個人（夫あるいは妻）をもとの世帯に戻して（世帯復元して）、分析を進める必要があった。個人データに付されている調査区、世帯番号、世帯員番号などの情報を手がかりに世帯復元し、かつ夫妻いずれかが65歳という条件を付して、集計を進めた結果、13,588件<sup>3)</sup>の高齢者夫妻世帯を得た（表1参照）。

高齢者夫妻世帯の13,588件のサンプルから母集団の世帯数を計上すると、それは全国で309.4万世帯になる<sup>4)</sup>。これは夫妻のみの世帯数の35.0%、全世帯の6.6%の規模である<sup>5)</sup>。

また、本稿の分析の対象となる老老介護世帯のサンプル数は、表2の通りである。夫が妻を介護している世帯は55世帯ある。そのうち何らかの外部支援を受けている世帯は23世帯、受けていない世帯は32世帯ある。一方、妻が夫を介護している世帯は101世帯ある。そのうち何らかの外部支援を受けている世帯は40世帯、受けていない世帯は61世帯ある。なお、世帯の復元数も計上した。全国レベルでの世帯規模がどれくらいかが理解できる。

表1 分析対象のサンプル数および母集団復元世帯数

高齢者夫妻世帯データ		
サンプル数		
平日	3,807 世帯	
土曜	4,898 世帯	
日曜	4,883 世帯	
合計	13,588 世帯	
復元世帯数		
	夫	妻
平日	2,575,748 人	2,567,606 人
土曜	4,415,107 人	4,391,446 人
日曜	4,410,092 人	4,392,041 人
合計	3,100,437 人	3,088,788 人

表2 老老介護夫妻世帯データ数

老老介護夫妻世帯データ						
夫が介護				妻が介護		
		サンプル数	復元数			復元数
		55 世帯	10,398 世帯			27,680 世帯
外部支援	有	23 世帯	4,935 世帯	外部支援	有	11,378 世帯
	無	32 世帯	5,462 世帯		無	16,302 世帯

### 3. 分析枠組および生活時間分析手法

#### (1)分析枠組

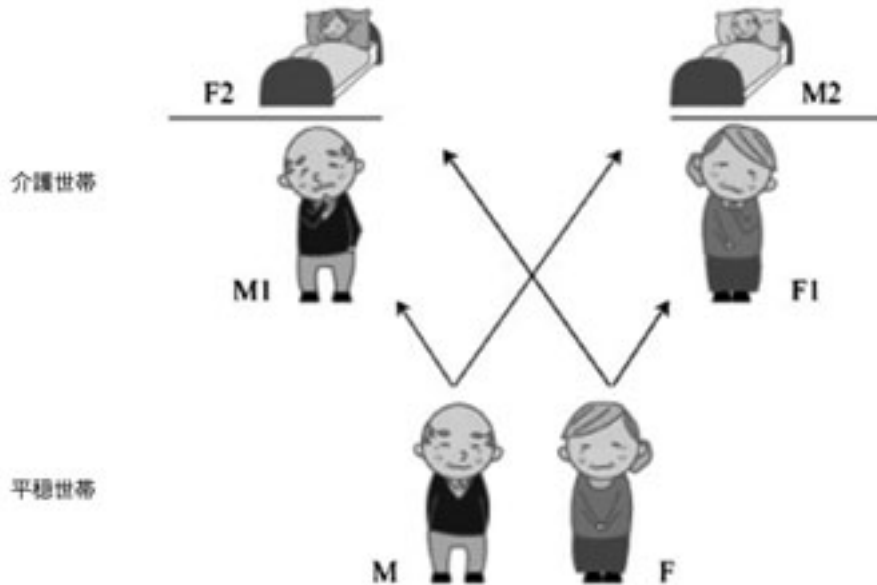
本研究の目的は、2人暮らしの高齢者夫妻のいずれかが介護を必要とする状況に陥った時に、平穏だった日常にどのような変化が生じるのかを、生活時間研究データを用いて明らかにすることである。用語の定義、分析の枠組みを提示しておこう（図1参照）。

「老老平穏夫妻世帯」とは、夫（M）、妻（F）がともに健常で平穏な日々を送っている場合である（以下、老老平穏世帯、平穏世帯とも呼称）。また、夫妻のいずれかが晩秋期に入った高齢者夫妻世帯を「老老介護夫妻世帯」と呼ぶ（以下、老老介護世帯、介護世帯とも呼称）。それは妻が病に伏し（F2）、夫が介護する場合（M1）、もしくは逆に夫が病に伏し（M2）、妻が介護する場合（F1）が想定される。

本稿ではとりわけ、（a）夫あるいは妻が介護に回った時に、彼／彼女らの平穏な生活がどのように変化し（M→M1あるいはF→F1）、結果としてどのような介護生活が展開するのか（M1、F1）に焦点を当てて、分析する。

また、（b）介護される側に関しても、平穏だった日々がどのように変化するか（M→M2あるいはF→F2）、被介護状況（療養生活）を余儀なくされた時にどのような生活を送ることになるのか（M2、F2）も興味があるが、本稿では介護者の介護生活に関係させて論じるにとどめる。

図1 本研究の分析枠組



## (2)生活時間分析手法

生活時間研究においては、①個人の日記データにもとづき、個人の生活の1日の流れを分析する方法<sup>6)</sup>、②個人の日記データを集計して、時刻ごとに人びとがどの行動に従事しているのかを検討する「時刻別行為者率アプローチ」<sup>7)</sup>、③各種行動の平均時間をもとにした「平均時間アプローチ」<sup>8)</sup>がある。また、④個票データを用いて、多重回帰により変数間の関係を分析するアプローチもある。

本稿では平均時間アプローチと時刻別行為者率アプローチをもとに、平穏生活から介護生活に転じた場合の夫あるいは妻の生活時間構造の変化(M→MI、F→FI)を中心に観察し、さまざまな特徴を指摘する。以上で得られた知見をもとに、後段では福祉政策上の含意を提示していく。

## 4. 老老平穏夫妻世帯と老老介護夫妻世帯の生活時間構造の分析

### (1)時刻別行為者率アプローチによる分析

#### 1)老老平穏夫妻世帯の生活リズム

「社会生活基本調査」では1日の人の生活行動を20種類の行動で記録する。20種類の行動は大きく3つのカテゴリーに括ることができる。すなわち、生理的欲求充足関係の行動からなる第一次活動(睡眠、身の回りの用事、食事)、官民の事業所を支える仕事、家庭を支える家事などからなる第二次活動、それにテレビ、趣味・娯楽、スポーツ、受診・療養など余暇活動に関係した第三次活動である。「社会生活基本調査」では被調査者は15分ごとに20種類の行動のいずれか1つに従事していたかを記録する(ながら行動を記すことは求められていない)から、15分の時刻単位での20種類の行動の行為者率の合計値、したがって3つの大きなカテゴリーでの行為者率の合計値はともに100%である。

老老平穏世帯の生活リズムの様子を時刻別行為者率データを用いて観察しよう。図2-

1 「老老平穏世帯の夫の生活時間構造」、**図3-1**「老老平穏世帯の妻の生活時間構造」は、老老平穏世帯の夫および妻の1日の各種行動の行為者率の推移を面グラフにより示したものである。夫妻いずれもその面グラフは3つの行動が平板に積み上がっている。

夫妻のいずれかが65歳以上かつ両者とも無職、という条件設定がしてあるから、夫妻とも仕事の行為者率はどの時刻も0%である。しかし、夫に比し妻の場合は、家事に従事することが多いから、妻の第二次活動は大きな行為者率を示している。第三次活動は、夫妻ともテレビ、休養、趣味・娯楽が大きな割合を占める。しかし、夫は妻に比して家事に従事することが少ないぶん、どの時刻帯も妻の行為者率よりも大きな推移を示している。

## 2) 老老介護夫妻世帯の生活リズム

### A. 平穏生活から介護生活へ

夫妻のいずれかが介護を受ける立場に至った場合、連れ合いの夫あるいは妻は介護者となり、彼／彼女らの平穏な生活は大きな変化を受ける。**図2-2**「老老介護世帯の夫の生活時間構造」、**図3-2**「老老介護世帯の妻の生活時間構造」は、そうした事態に至った夫もしくは妻の一日の生活リズムを示している<sup>9)</sup>。

老老平穏世帯の場合、夫妻いずれもその面グラフは各種行動が平板に積み上がっていた(**図2-1**、**図3-1**参照)。しかし、老老介護世帯の場合、介護する側に回った夫や妻の生活リズムは大きく変化し、各種行動は介護行動により攪乱されて、入り乱れた状況を示している。

夫の場合は、介護行動に加えて家事行動も増大しており、生活の変化は、介護に回った妻の場合よりも変化が大きいことが推察される。これについては、後段の文字グラフを用いた時刻別行為者率アプローチにより明らかにする。

### B. 介護生活と受診・療養生活

被介護者の受診・療養行動と介護者の介護行動は、両者の行為者率の推移を示す折れ線グラフを比較考量すれば、関係性の観察が容易である。夫が介護者に回った場合に関しては、**図4-1**「時刻別行為者率に見る老老介護世帯における介護—受診・療養関係（妻が被介護者の場合）」、妻が介護者の場合は、**図4-2**「時刻別行為者率に見る老老介護世帯における介護—受診・療養関係（夫が被介護者の場合）」に示した。また、昼間は受診・療養生活、夜間は睡眠に費やすと思われる被介護者の生活を理解するために、**図5-1**「被介護者の生活リズム（妻の場合）」、**図5-2**「被介護者の生活リズム（夫の場合）」も示した。

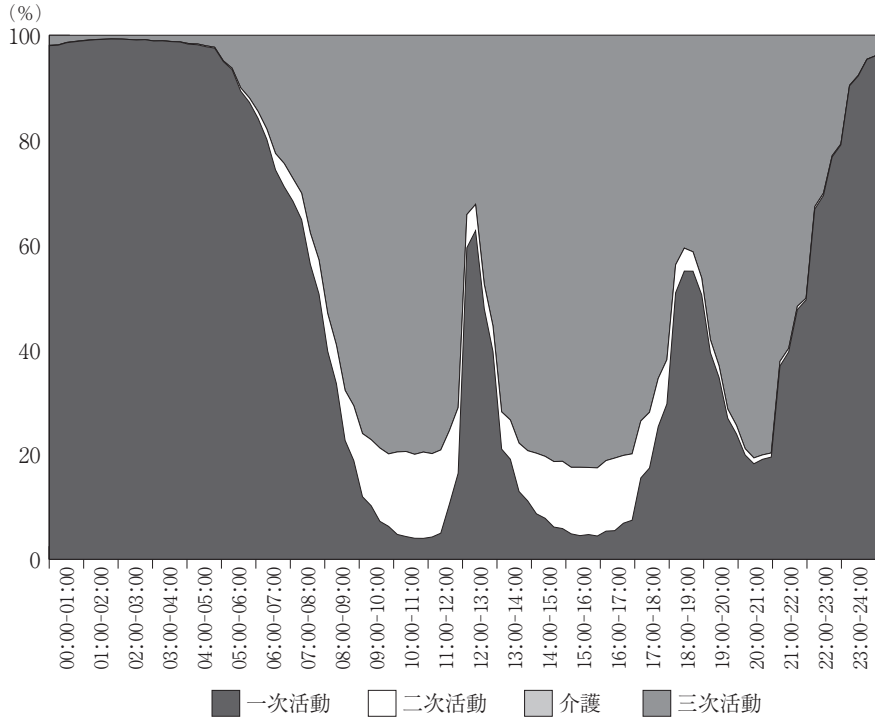
まず、被介護者の受診・療養行動と介護者の介護行動の関係に焦点を当てて、両者の関係を見よう (**図4-1**、**図4-2**参照)。

時刻別行為率をもとに描かれた折れ線グラフを、波形（リズム）と波高に分けて事実発見に努めよう<sup>10)</sup>。また、平均時間の多寡にも同時に言及する。ちなみに、平均時間は[1日の特定の行動の平均時間＝(行為者率(%)の合計×15分)／100%]で導かれる。

波高を見れば、

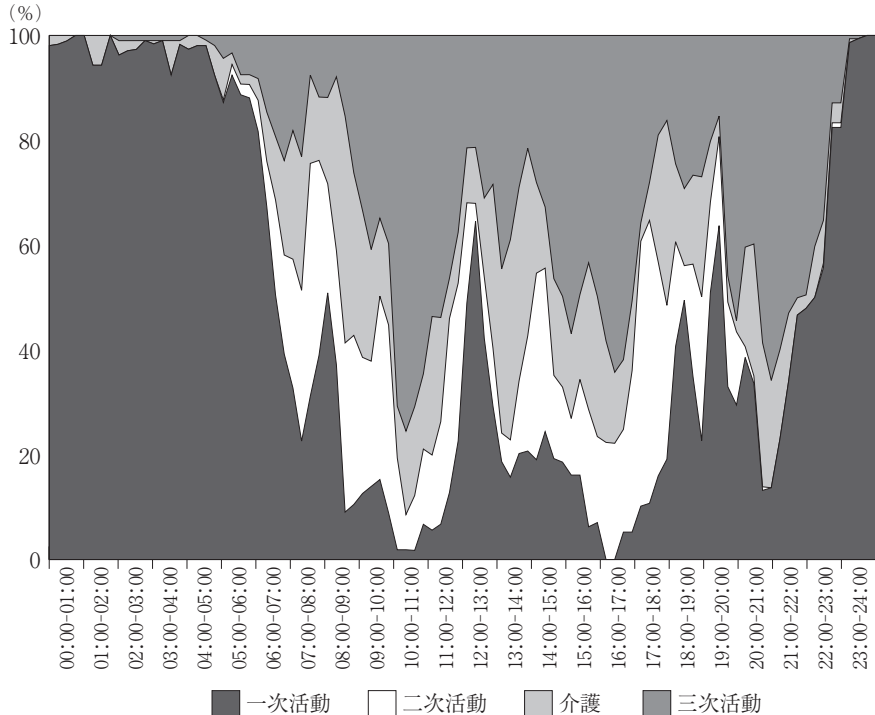
- ① 介護の波高は、夫が介護者の場合 (**図4-1**) であっても、妻が介護者の場合 (**図4-2**) であっても、受診・療養の波高よりも低い。

図 2-1 老老平穏世帯の夫の生活時間構造（行動 3 大分類）



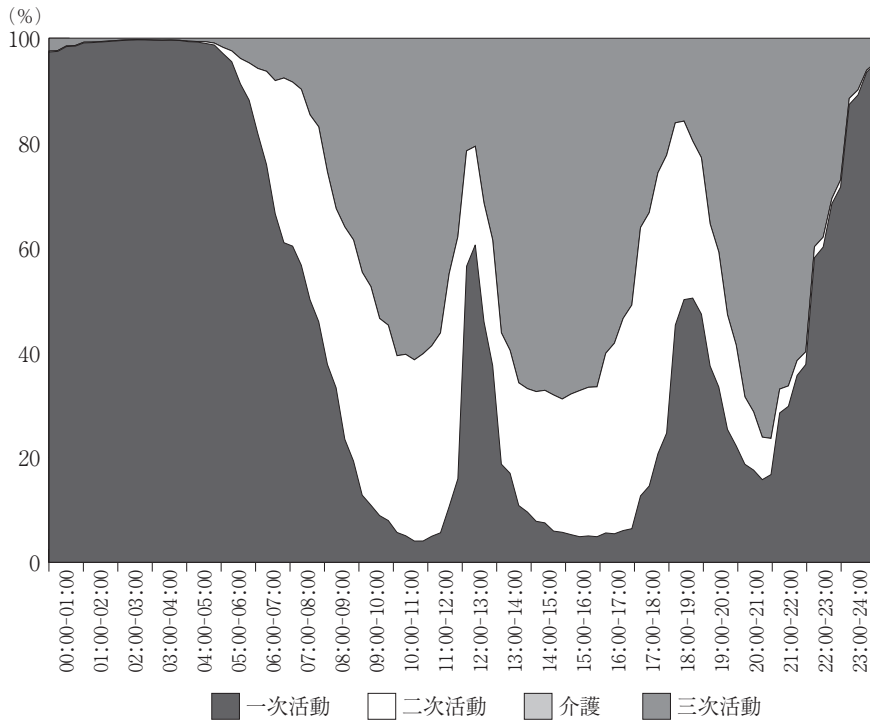
(注) 本図は1日の行為者率の変化を、96の時刻ごと（15分単位）に描いたものである。ここでは、最小の時刻の目盛り（15分単位）ではなく、1時間の幅で時刻を表現している。

図 2-2 老老介護世帯の夫の生活時間構造（行動 3 大分類）



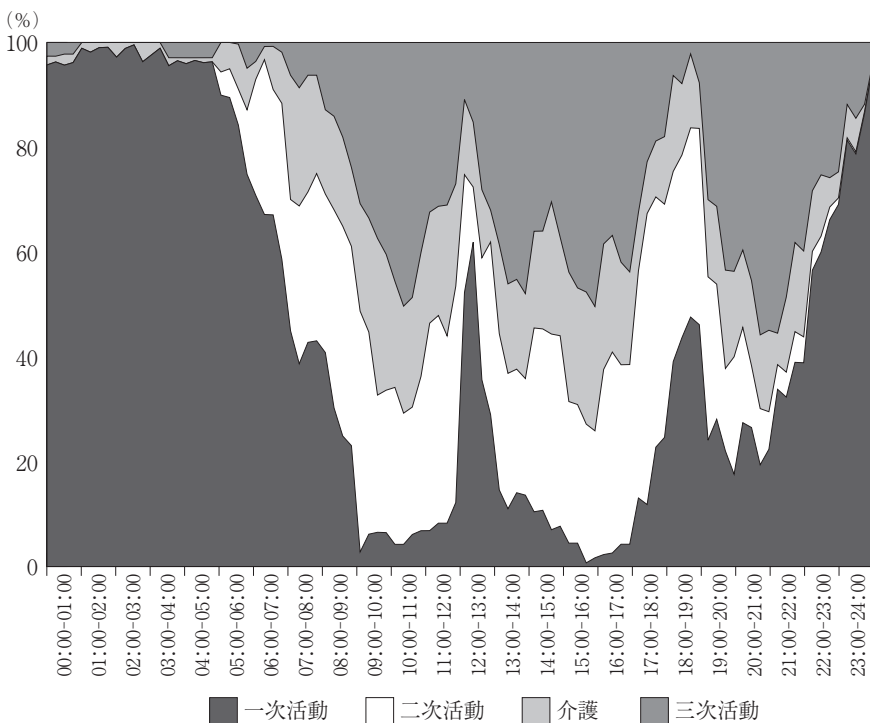
(注) 図 2-1 の注に同じ。

図3-1 老老平穏世帯の妻の生活時間構造（行動3大分類）



(注) 図2-1の注に同じ。

図3-2 老老介護世帯の妻の生活時間構造（行動3大分類）



(注) 図2-1の注に同じ。



被介護者の生活が夜間の睡眠を除けば、昼間はおそらく受診・療養生活を送っているから、その波高が高い（行為者率が高い）のは当然である。これに対し介護者は介護に追われているが、他方、家事を始めとした自らの日常の諸行動にも従事しているから、介護の行為者率の波高は被介護者の受診・療養の波高に比べ相対的に低い。

上記の平均時間の算出過程からも明らかなように、

- ② 介護時間の平均時間は受診・療養の平均時間より短い。

波形を見れば、

- ③ 介護の波形（リズム）は、夫が介護者の場合（図4-1）であっても、妻が介護者の場合（図4-2）であっても、受診・療養の波形（リズム）と同様の推移を示す。

就寝時間帯も含め、介護は受診・療養生活に連れ添う関係である。

介護が受診・療養に相即的であることは、端的には波形に反映している。受診・療養のリズムが介護のリズムを支配していると思われるが、介護者の都合で受診・療養のリズムが決まる場合もあることはいうまでもない。

被介護者の生活リズムはどのような様相を示すのであろうか。「受診・療養」を余儀なくされている夫あるいは妻の生活リズムを、睡眠行動と受診・療養行動に限って描いたのが図5-1と図5-2である。両図から理解されることは、

- ④ 被介護者の生活の基調は、睡眠と受診・療養の行動からなる生活である。

いずれの図においても被介護者の生活は、夜間は睡眠、昼間は受診・療養といった関係である。とりわけ、妻が被介護者の場合は夫が被介護者の場合よりも、受診・療養が昼間に占める割合が高いのが注目される。

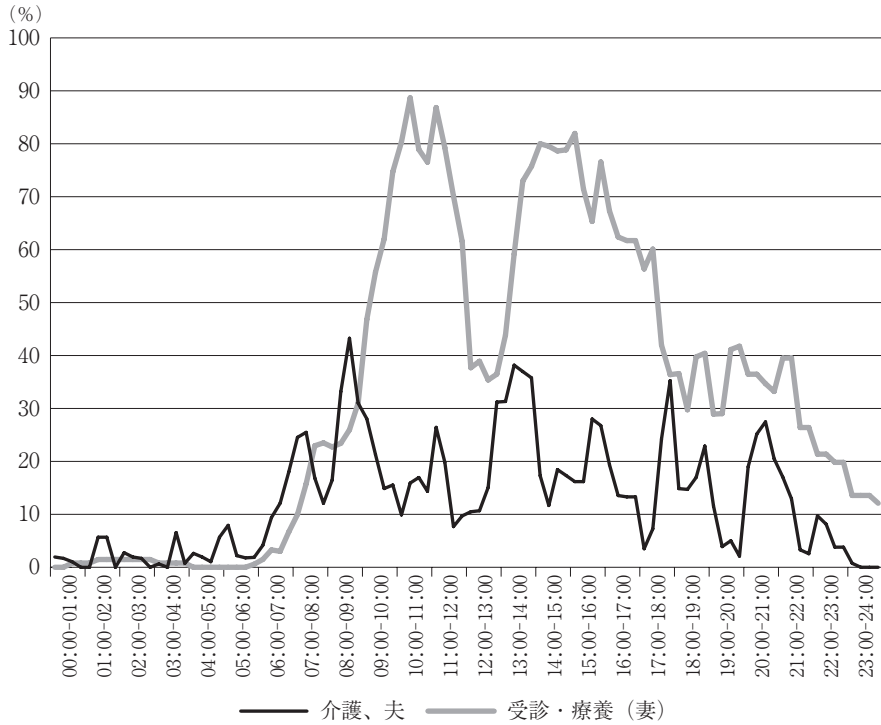
### 3) 文字グラフを用いた時刻別行為者率アプローチによる分析

老老介護世帯で介護者の立場に回った夫あるいは妻の介護行動は、夫妻が健常だった時と比べると激変したと思われる。その生活の激変を文字グラフを用いて観察し、知見を獲得しよう。文字グラフを用いた動態分析によれば、介護が平穩時のどのような行動を犠牲にして成立しているのかを明らかにできる<sup>11)</sup>。

文字グラフの作成に際しては48行20列（各行は48の時刻からなり、各列は20種類の行動を示す）の情報を用いる。元は96行20列（15分刻み）であるデータを、ここでは48行20列（30分刻み）に変換して用いる。文字グラフはアルファベット1文字に特定の行動の種類を割り当て（睡眠ならばSというアルファベットを充当）、さらに行為者率も表現させる<sup>12)</sup>。以下の図では1文字に1%の行為者率を割り当てている。特定の時刻で90%の人が睡眠に従事しているなら、Sの文字を90個連ねることになる。

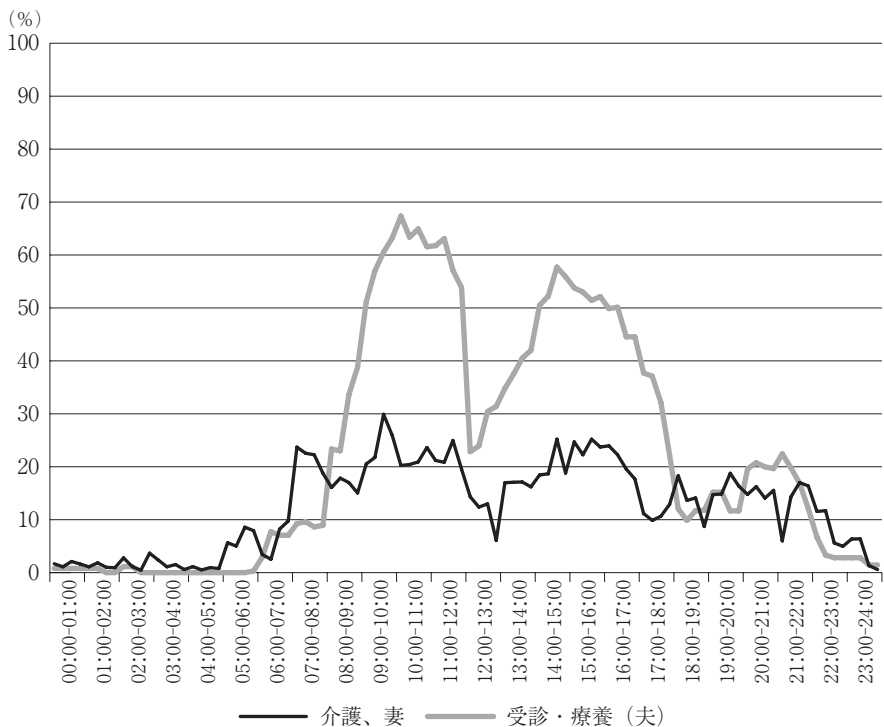
本来なら夫のデータを用いた時刻別行為者率アプローチも提示すべきであるが、紙幅の

図4-1 時刻別行為者率に見る老老介護世帯における介護—受診・療養関係（妻が被介護者の場合）



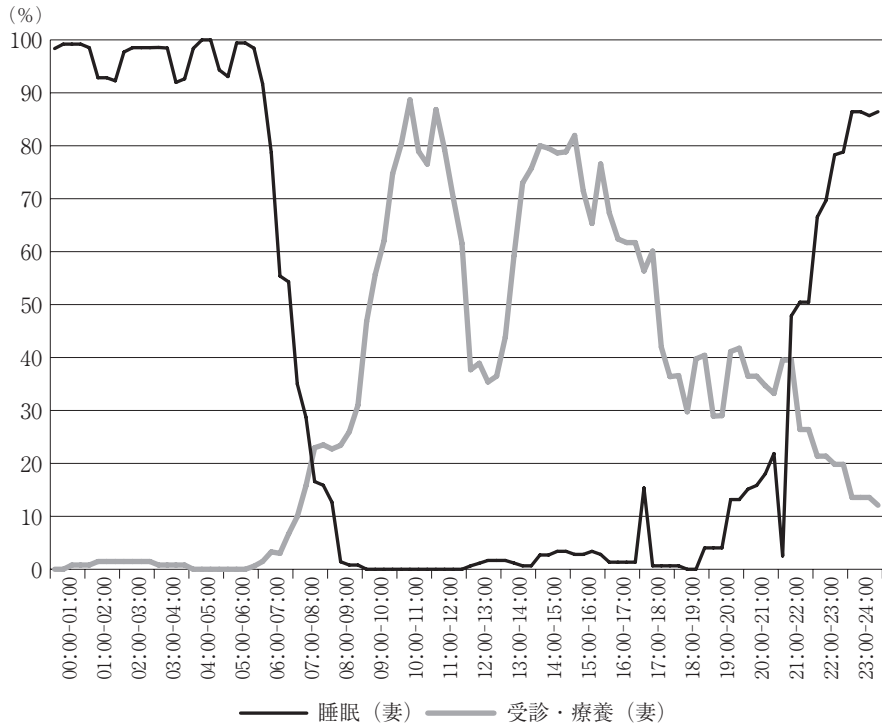
(注) 図2-1の注に同じ。

図4-2 時刻別行為者率に見る老老介護世帯における介護—受診・療養関係（夫が被介護者の場合）



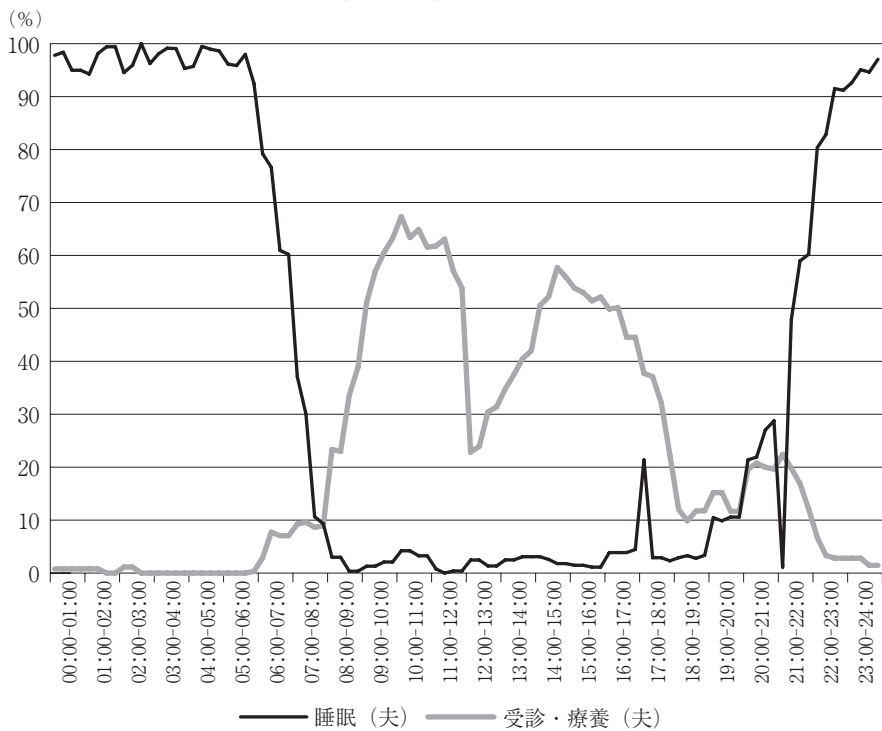
(注) 図2-1の注に同じ。

図 5-1 被介護者の生活リズム (妻の場合)



(注) 図 2-1 の注に同じ。

図 5-2 被介護者の生活リズム (夫の場合)



(注) 図 2-1 の注に同じ。

関係で妻の場合のみを示す。図6「老老平穏世帯の妻の生活時間構造」、図7「老老介護世帯の妻の生活時間構造」がそれぞれである<sup>13)</sup>。介護に回った妻のサンプル数は101人であるが、ここではそれを100%と標準化して（101人を100%と考えて）、各時刻の各種行動への参加率を計上し、時刻別行為者率表を作成している。

図6の平穏世帯の妻の時刻別行為者率表では8列目の介護行動（NURSING）の行為者率を示す数値は各時刻すべて0%である。したがって、右の文字グラフにも表現されず、Nという文字は見当たらない。これに対し、図7の介護者に回った妻の時刻別行為者率では、8列目に介護行動の数値が並び、右の文字グラフにもNという文字が行為者率の規模ぶん表現されている。平穏生活を送っていた妻が介護者に回り、生活が変化した様子が生活時間構造文字グラフを通して鳥瞰可能である。

介護行動が日常生活に入ることにより、その他の様々な行動が変化を受けたことが推察される。どのように生活の中味が変化したのかを理解するためには、生活時間構造の動態的分析の手法を適用し、観察することが可能である。

#### 4) 文字グラフを用いた生活時間構造の動態的分析

ここでは妻が平穏生活から介護生活に移行する場合の生活時間構造の変化を、動態的分析の一連の手順を適用し、観察を試みよう。

**【第1ステップ】** 老老平穏夫妻世帯と老老介護夫妻世帯の48行20列の時刻別行為者率表を比較考量して、最小値マトリックスを作成する。

最小値マトリックスとは、もとの2つのマトリックスを比較して、同じ行列要素のより少ない方の行為者率から作成される48行20列のマトリックスのことである。

例えば平穏世帯の時刻別行為者率表の3行1列が99%で、介護世帯の時刻別行為者率表の同じ行列要素（3行1列）が95%なら、より少ない後者の95%を最小値マトリックスの3行1列目の値として確定する。最小値マトリックスのデータは、平穏な生活でも、介護負担が入った生活でも変わらない行動を保持している人の割合を示している。ここでは1列目は睡眠であるが午前1時～1時30分（3行目）の時刻をとれば、95%の人が変わらず睡眠している、ということの意味している。ちなみに、減った4%の睡眠率は身の回りの用事に回っている。いずれにしても最小値マトリックスで表現されている行為者率は、前後変わらない行動パターンを示した人の割合（生活時間構造の「非変動部分」）を示している。

**【第2-1ステップ】** 老老平穏夫妻世帯マトリックスから最小値マトリックスを減じる。

ここで得られた48行20列の差分マトリックスは、老老平穏世帯特有の行為者率データだと考えられる（老老平穏世帯特有行為者率マトリックス）。

**【第2-2ステップ】** 老老介護夫妻世帯マトリックスから最小値マトリックスを減じる。

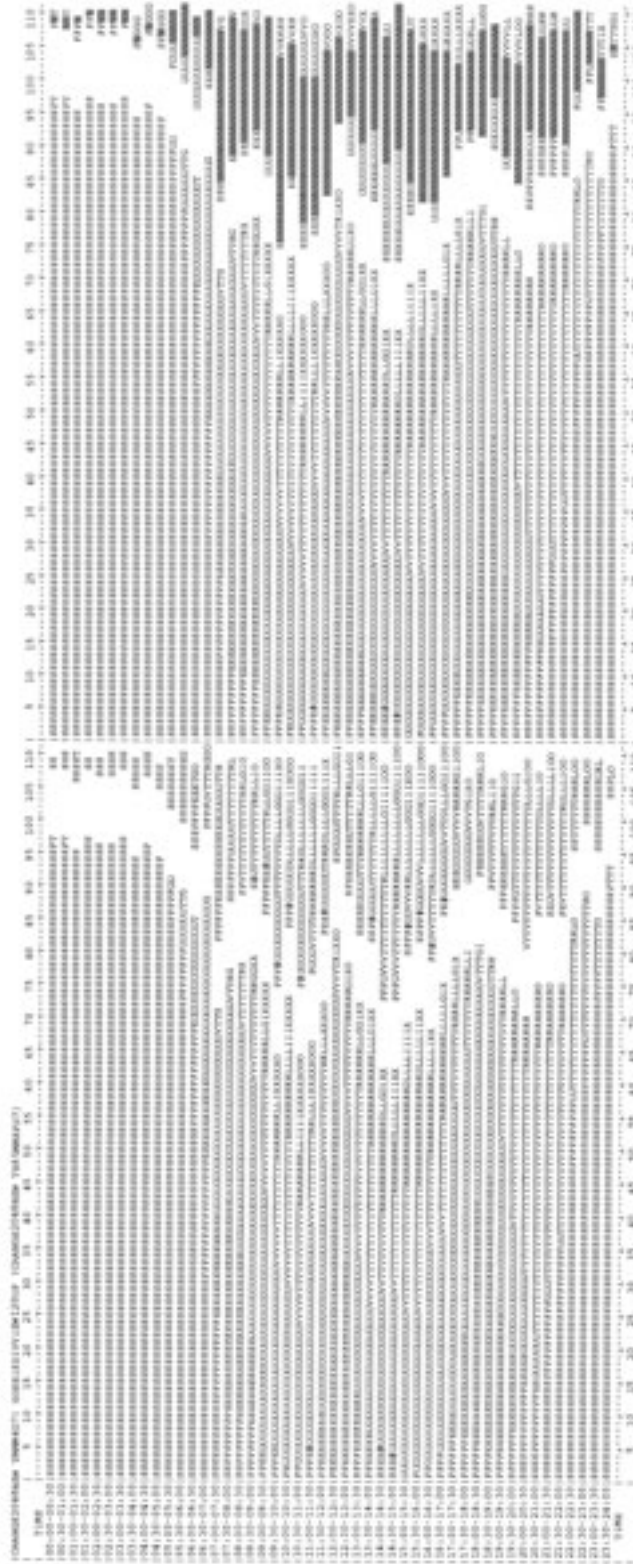


図7 老老介護世帯の妻の生活時間構造

生活時間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
睡眠	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
起床	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
朝食	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
洗濯	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
掃除	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
買い物	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
食事	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
介護	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
読書	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
散歩	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
その他	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

(注) 介護 (N) には色づけをし、識別を容易にしている。

図 8 老老平穏世帯と老老介護世帯の生活時間構造の変動内容（妻の場合）



(注) 図7の注に同じ。

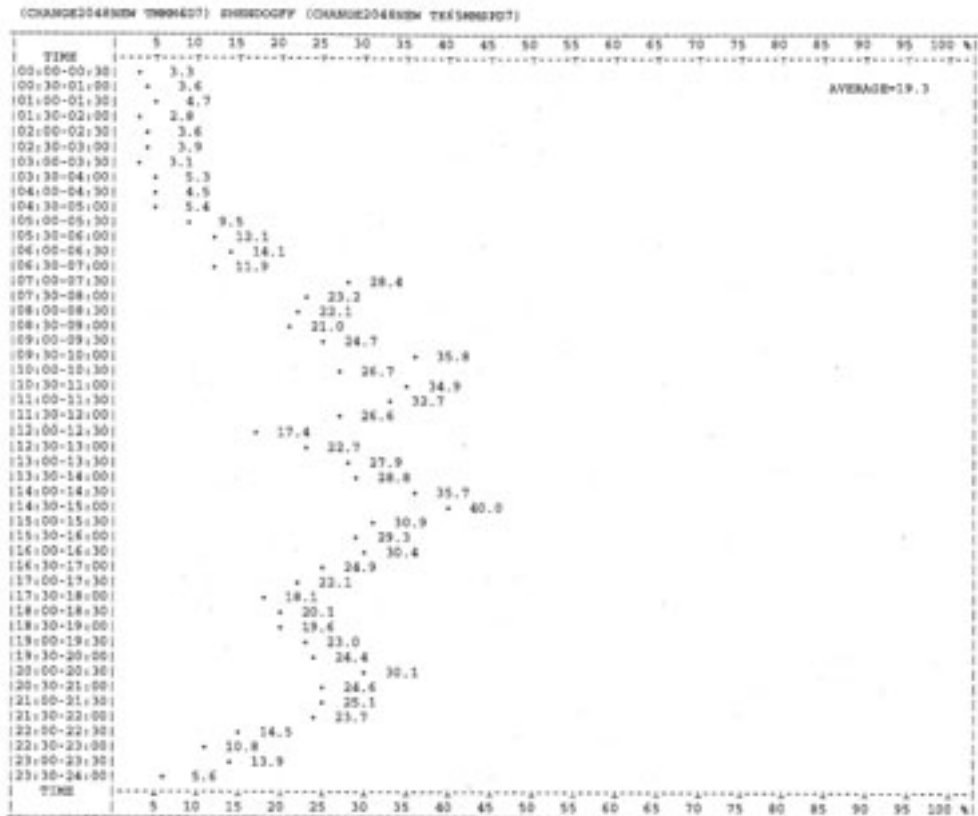
この差分マトリックスは、老老介護世帯特有の行為を意味するデータだと考えられる（老老介護世帯特有行為者率マトリックス）。

老老平穏世帯特有行為者率マトリックスと老老介護世帯特有行為者率マトリックスを文字グラフに変換し比較すれば、老老平穏世帯から老老介護世帯に移行する局面の様相が観察でき、2つの入れ替わった行動の推移の内容（生活時間構造の「変動部分」）を理解できる。

図8「老老平穏世帯と老老介護世帯の生活時間構造の変動内容（妻の場合）」は、左に老老平穏世帯の生活時間構造、右に老老介護世帯の生活時間構造を示している。左から順に、平穏世帯の非変動部分（最小値マトリックスの文字グラフ）、変動部分（老老平穏世帯特有行為者率マトリックスの文字グラフ）、介護世帯の非変動部分（最小値マトリックスの文字グラフ）、変動部分（老老介護世帯特有行為者率マトリックスの文字グラフ）を示す。一番右の介護世帯の変動部分の文字グラフにはNの文字、要するに介護行動を示す文字グラフが多数見られる。それ以前に、妻が平穏生活時に享受していた行動群は左から2番目の平穏世帯の変動部分に示されている。

介護世帯の変動部分（特有行動）は、平穏世帯の変動部分を犠牲にして成立していると考えられる。

図9 老老平穏世帯から老老介護世帯の移行に伴う時刻ごとの変動率（妻の場合）





【第3ステップ】 変動規模を測定する。

図9「老老平穏世帯から老老介護世帯の移行に伴う時刻ごとの変動率（妻の場合）」は、各時刻の変動規模の割合を示したものである。変動率とは変動部分が全体（＝非変動部分＋変動部分）に占める割合である。夜間は睡眠が主流を占めるので変動率はわずかであるが、昼間は最大で40%の人が行動の種類を変化させたことが分かる。30分ごとの変動率をすべて足し合わせ、48の時刻数で除したものが、変動率の平均値である。

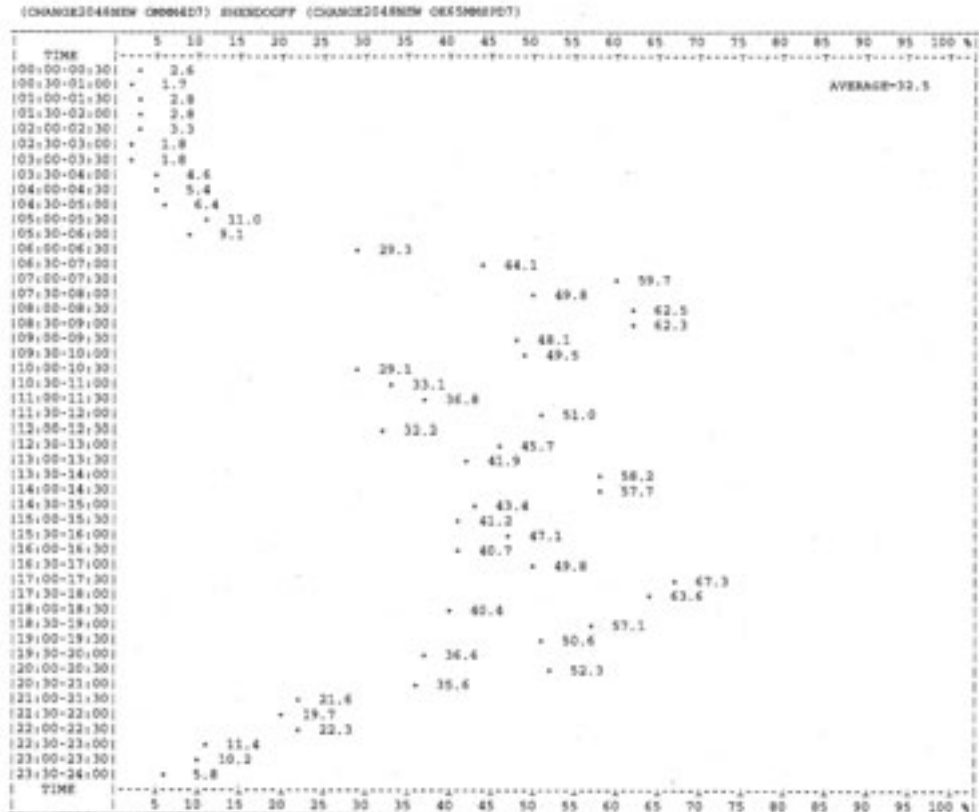
妻の場合、19.3%であった。他方、夫の場合は変動率の平均値は32.5%である（図10参照）。

- ⑤ 老老平穏世帯から老老介護世帯の移行に伴う、時刻別の変動規模は妻よりも夫の方が大きい。これは妻が倒れた時、夫の方が大きな生活の変化を余儀なくされることを示している。

【第4ステップ】 変動内容を比較する。

図8の老老平穏世帯と老老介護世帯の変動構造部分を取り出し、対峙させたのが図11

図10 老老平穏世帯から老老介護世帯の移行に伴う時刻ごとの変動率（夫の場合）



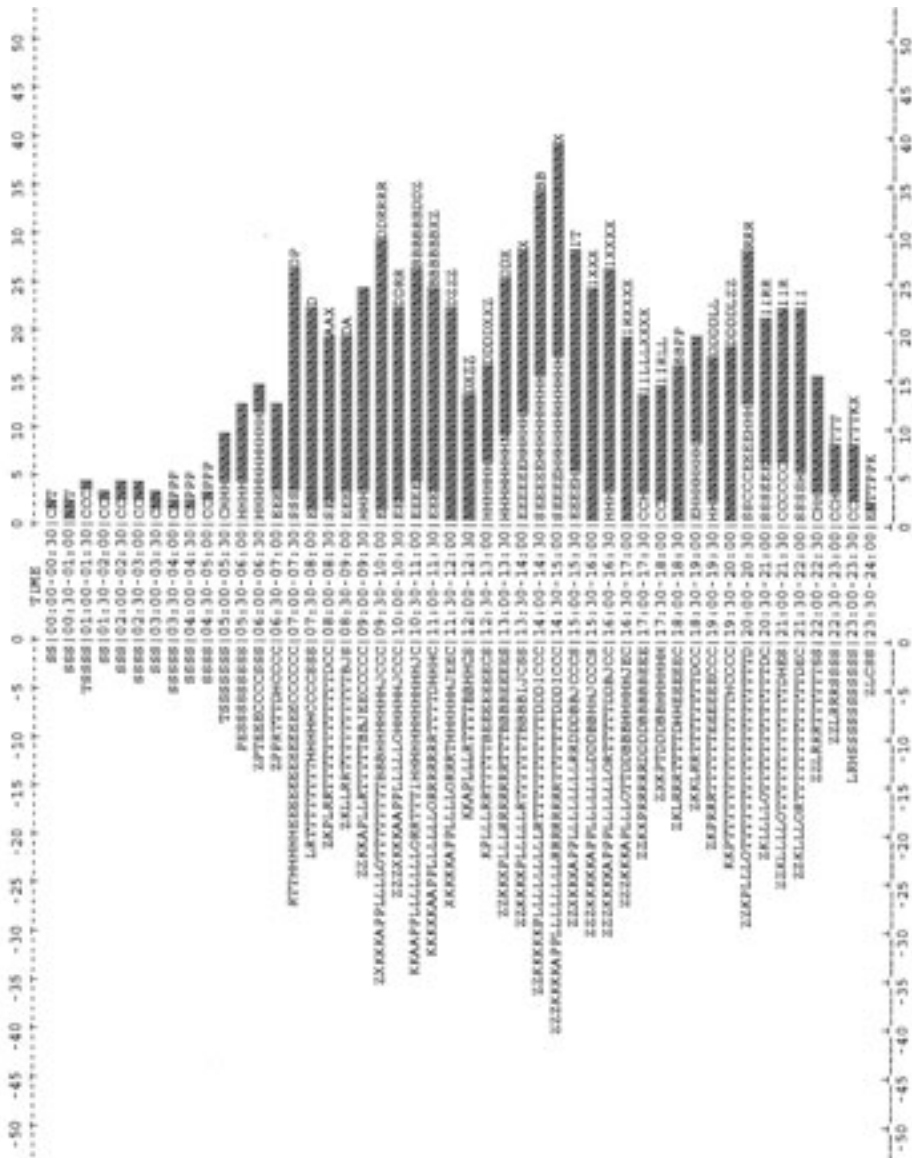
「老老平穏世帯と老老介護世帯の生活時間構造変動の内容比較（妻の場合）」である。比較を容易にするために、老老介護世帯の変動構造部分の文字グラフを180度回転させている。図11を通して、我々は平穏生活から介護生活への変化を余儀なくされた妻の生活時間構造の変動内容を理解できる。

5)妻の時刻別行為者率の変動分析から得られた知見  
 変動内容を比較考量して知見の獲得を目指そう。

A. 妻の場合（図11参照）

左の老老平穏世帯の文字グラフは夫妻で平穏な生活を送っていたころの妻の一連の生活時間構造を示している。右は老老介護世帯に移行した後に、妻が新たに獲得した生活時間

図11 老老平穏世帯と老老介護世帯の生活時間構造変動の内容比較（妻の場合）



(注) 図7の注に同じ。

構造を示している。妻が介護で忙殺されている状況（Nの文字）が一目瞭然である。これに対して、左の生活時間構造は、介護の必要がない状況下で享受していた妻の平穏な1日の生活行動群（T：テレビ、L：レジャー、K：交際）の文字から構成された文字グラフである。これらは介護のために犠牲になった生活の行動の中味とタイミングを示していると考えられる。知見を記そう。

- ⑥ 妻はテレビ、レジャー、交際などの余暇活動（第三次活動）を犠牲にして、夫を介護している。

#### B. 夫の場合（図12参照）

夫の場合は、新たに獲得した行動群の中に、家事（H）が多く含まれている。これは夫が介護（N）とともに、これまで妻が引き受けてくれていた家事も引き受けなければならなくなった事情を反映していると考えられる。犠牲になった行動群は妻の場合と同様である。

- ⑦ 夫は妻の介護に当たって、当該の介護に加えて妻が担っていた家事も担うようになる。介護と家事への参加に伴い、夫は一挙にテレビ、レジャー、交際などの余暇活動（第三次活動）の機会を失う。

#### (2)平均時間アプローチによる分析

表3「老老平穏世帯から老老介護世帯への移行に伴う平均時間量の推移」は、平穏だった生活に介護負担が入ることで、どのように生活時間構造が変化したのかを、夫、妻のそれぞれの場合に関し、平均時間量をもとにまとめたものである。

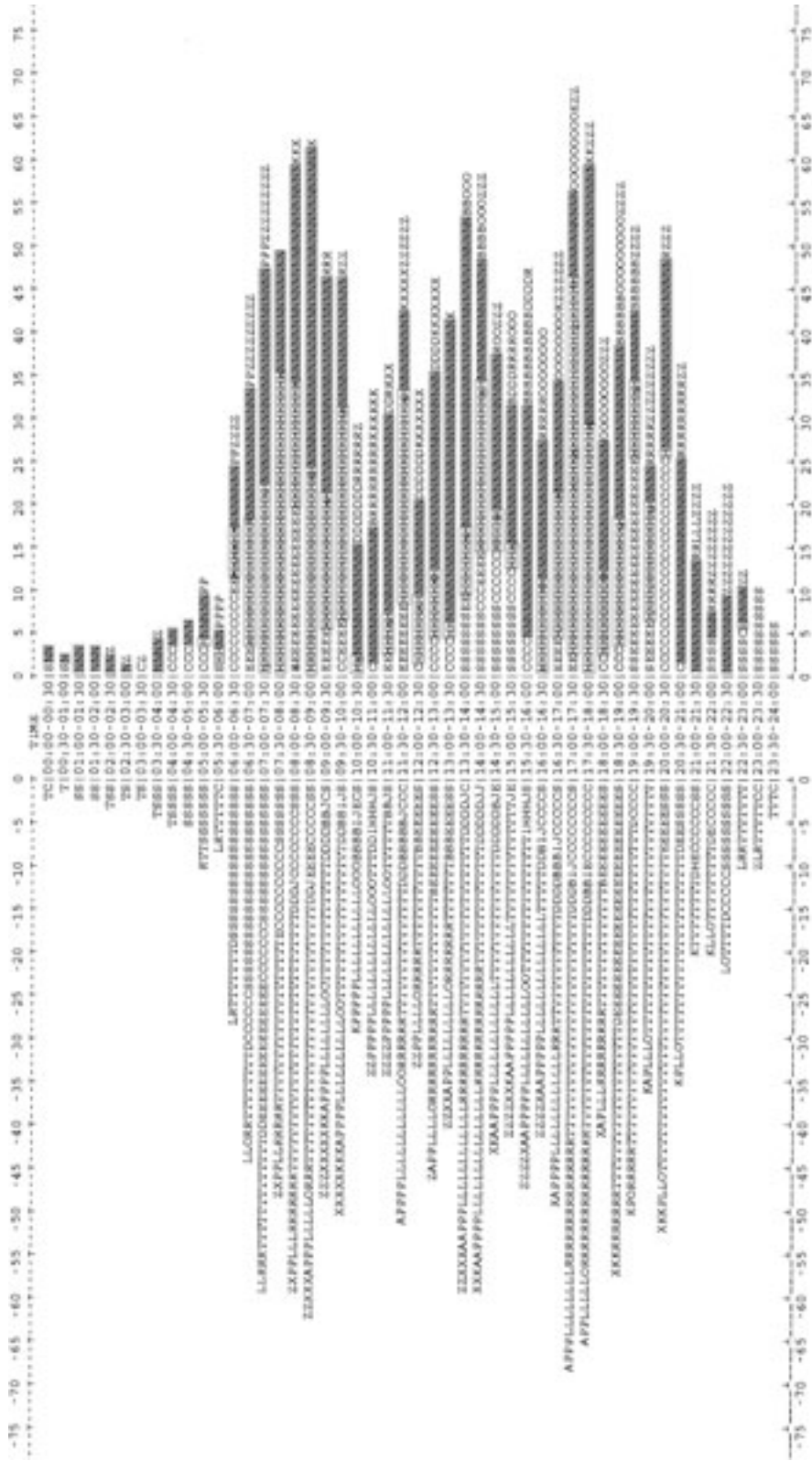
夫の場合を例に挙げると、1列目に老老平穏時の段階での各種行動の平均時間量が計上されている。2列目（老老介護）は介護を担うようになったときの各種平均時間量を示している。3列目は2列目（老老介護）から1列目（老老平穏）の数値を減じて得られた数値を計上している。

4列目は3列目の増減の数値をもとに寄与率を計上したものである。これは増加と減少の数値をもとに、増加の寄与率、減少の寄与率それぞれを示している。増加寄与率に関しては、全体の増加量の中で各増加項目が何パーセント寄与したのかを示している（通常表記の数値参照）。減少についても減少の総量の中で、各減少項目がどれだけ減少方向に寄与しているかを見た（カッコ内の数値参照）。

夫の場合は家事が117.87分、介護が186.81分増加する。その増大の寄与率はそれぞれ35.3%、56.0%であり、合計91.3%に上っている。この反面、テレビ視聴が-163.68分、趣味・娯楽が-64.73分でマイナスに対する寄与率はそれぞれ49.1%、19.4%である。もう少し大きな括りで活動項目を見ると、テレビ視聴、趣味・娯楽からなる第三次活動が総じて265.38分の減少で、その減少に対する寄与率は90.1%に達する。

増大の全体規模は294.54分、減少の全体規模は294.55分である。1日の約5時間が、介護生活に移行すると変化することが分かる。

図12 老老平穏世帯と老老介護世帯の生活時間構造変動の内容比較 (夫の場合)



(注) 介護 (N) には色づきを、家事 (H) にはケイ囲みを付し、識別を容易にしている。

表3 老老平穏世帯から老老介護世帯への移行に伴う平均時間量の推移

	夫					妻			
	老老平穏	老老介護	増減	寄与率		老老平穏	老老介護	増減	寄与率
睡眠	516.41	494.54	-21.87	(6.6)	睡眠	483.58	462.33	-21.25	(11.0)
身の回り	77.28	71.96	-5.32	(1.6)	身の回り	83.26	73.19	-10.07	(5.2)
食事	123.10	121.12	-1.98	(0.6)	食事	122.85	121.74	-1.11	(0.6)
通勤・通学	0.21	0.00	-0.21	(0.1)	通勤・通学	0.10	0.00	-0.10	(0.1)
仕事	6.83	0.19	-6.64	(2.0)	仕事	4.77	0.69	-4.08	(2.1)
学業	0.07	0.22	0.15	0.0	学業	0.16	0.00	-0.16	(0.1)
家事	44.62	162.49	117.87	35.3	家事	234.76	239.50	4.74	2.4
介護	0.00	186.81	186.81	56.0	介護	0.00	182.20	182.20	94.2
育児	3.07	0.00	-3.07	(0.9)	育児	3.89	5.98	2.09	1.1
買い物	23.92	23.55	-0.37	(0.1)	買い物	42.30	37.39	-4.91	(2.5)
移動	32.95	24.90	-8.05	(2.4)	移動	31.80	28.97	-2.83	(1.5)
テレビ他	298.99	135.31	-163.68	(49.1)	テレビ他	207.51	150.49	-57.02	(29.5)
休養	108.42	83.31	-25.11	(7.5)	休養	80.40	64.65	-15.75	(8.1)
学習・研究	13.43	20.91	7.48	2.2	学習・研究	5.17	1.41	-3.76	(1.9)
趣味・娯楽	77.48	12.75	-64.73	(19.4)	趣味・娯楽	50.31	20.61	-29.70	(15.4)
スポーツ	28.99	9.04	-19.95	(6.0)	スポーツ	13.66	7.36	-6.30	(3.3)
ボランティア	10.10	2.56	-7.54	(2.3)	ボランティア	6.96	2.72	-4.24	(2.2)
交際・付合	22.90	23.03	0.13	0.0	交際・付合	30.20	8.89	-21.31	11.0
受診・療養	23.18	18.24	-4.94	(1.5)	受診・療養	17.76	22.21	4.45	2.3
その他	28.08	49.09	21.01	6.3	その他	20.54	9.70	-10.84	(5.6)
一次活動	716.79	687.62	-29.17	(9.9)	一次活動	689.69	657.26	-32.43	(17.8)
二次活動	78.72	186.45	107.73	36.6	二次活動	285.98	283.56	-2.42	(1.3)
介護活動	0.00	186.81	186.81	63.4	介護活動	0.00	182.20	182.20	100.0
三次活動	644.52	379.14	-265.38	(90.1)	三次活動	464.31	317.01	-147.30	(80.9)

(注) 1) 「増減」の数値は、老老介護を担うことになった場合に生じる各種行動の時間数の変化を示したものである。

2) 「寄与率」の数値は、増加、減少のそれぞれの場合について算出している。増加の「寄与率」は、増加した各種行動の時間数を総増加時間数で除して100をかけたものである(単位は%)。減少の場合も同様である。

知見を書き出しておこう。

⑧ 夫の場合、介護参加に加え、妻が担っていた家事にも参加を余儀なくされ、テレビ視聴、趣味・娯楽などの余暇全般を犠牲にして介護生活に移行していることが平均時間量の観察から理解される。

妻の場合、介護行動が生活の前面に躍り出る。それは182.20分に上っている。増加に対する寄与率は94.2%に達している。従来から家事に従事してきたこともあり、家事時間は

4.74分しか増大していない。また、減少に関しては、主だったものではテレビ視聴、趣味・娯楽、交際・付き合いがそれぞれ57.02分、29.70分、21.31分減少している。妻の場合も、夫の場合と同様、これらを含む第三次活動が総計147.30分のマイナスで、その寄与率は80.9%である。その他、夫と異なるのは睡眠を始めとする第一次活動時間の減少で、-32.43分（寄与率17.6%）と高い。

増大の全体規模は182.20分、減少の全体規模は182.15分である。1日の約3時間が、介護生活に移行すると変化することが分かる。

- ⑨ 妻の場合、家事時間は飽和状況にあるため、家事時間の追加は少なく、むしろ介護の負担がそのまま変化の前面に現れるという特徴がある。妻による介護は、夫に比しもとと少ない第一次活動および第三次活動の時間を、さらに削減することによって行われている。

## 5. 老老平穩夫妻世帯と老老介護夫妻世帯の生活時間構造の分析に伴う政策的含意

ここまでの分析から、夫、妻にとって介護に参加することは、介護、家事自体の負担のみならず、テレビ視聴、レジャー活動など多くの余暇活動の機会の逸失を伴っていることが分かった。

政策的には介護者の夫や妻の介護負担をどのように軽減させるかが、考察の対象となる。これに関係した生活時間調査項目としては、「社会生活基本調査」の場合、日記帳式生活時間調査に付帯している「ふだん世帯以外の人から介護の手助けを受けていますか」[「世帯以外の人からの介護の手助け」とは、別居の親族からの手助けや介護サービス（訪問介護、日帰り介護などをいう）]という設問項目が考察に利用可能である。

回答者に対して手助けの内容を具体的に問うていないので、軽減効果があった支援項目を具体的に提示できない。しかし、一般的に「外部の手助け」があるときに、介護負担がどのように軽減されたのか否か、という大きな関係は見取ることができるので、これを紹介しておく。表4「外部支援の有無と介護負担」を見て含意を抽出しよう。

結論的に言うと、夫と妻の場合で、外部支援を得た結果としての生活時間の変化は異なる傾向を示す。夫の場合、外部支援を得ても介護に関しては時間数を減らさないまま、かえって家事時間を増加させる傾向がある。家事時間の増加ぶんを、夫はテレビ視聴、学習・研究などの第三次活動を削減して捻出している。

介護に当たる妻が外部支援を得た場合は介護負担は109.68分減少しており、介護負担の軽減という明確な効果を伴っている。休養も同時に42.59分減少している。これは介護の負担が軽減されたことで、長い休養をとる必要がなくなったということなのであろうか。そのぶん、テレビ視聴などが56.85分増加、身の回り用事が21.03分、買い物や移動も20分ほど増え、若干余裕が生まれているように見える。

表4 外部支援の有無と介護負担

	夫					妻			
	外部支援の有無		増減	寄与率		外部支援の有無		増減	寄与率
	なし	あり				なし	あり		
睡眠	518.58	477.23	-41.35	(19.7)	睡眠	466.53	456.37	-10.16	(5.7)
身の回り	81.28	62.73	-18.55	(8.8)	身の回り	64.75	85.78	21.03	11.7
食事	119.15	124.74	5.59	2.7	食事	125.56	115.91	-9.65	(5.4)
通勤・通学	0.00	0.00	0.00	0.0	通勤・通学	0.00	0.00	0.00	0.0
仕事	0.29	0.00	-0.29	(0.1)	仕事	0.37	1.10	0.73	0.4
学業	0.34	0.00	-0.34	(0.2)	学業	0.00	0.00	0.00	0.0
家事	86.39	221.53	135.14	64.3	家事	235.60	245.48	9.88	5.5
介護	185.94	179.10	-6.84	(3.3)	介護	226.95	117.27	-109.68	(61.0)
育児	0.00	0.00	0.00	0.0	育児	0.00	14.71	14.71	8.2
買い物	21.56	26.91	5.35	2.5	買い物	28.81	49.73	20.92	11.6
移動	18.21	27.73	9.52	4.5	移動	20.72	41.24	20.52	11.4
テレビ他	165.12	124.02	-41.10	(19.6)	テレビ他	127.25	184.10	56.85	31.6
休養	76.67	83.30	6.63	3.2	休養	81.93	39.34	-42.59	(23.7)
学習・研究	37.61	9.67	-27.94	(13.3)	学習・研究	0.92	2.04	1.12	0.6
趣味・娯楽	15.14	15.00	-0.14	(0.1)	趣味・娯楽	15.30	28.38	13.08	7.3
スポーツ	7.98	10.24	2.26	1.1	スポーツ	10.44	2.84	-7.60	(4.2)
ボランティア	4.13	0.00	-4.13	(2.0)	ボランティア	0.00	6.68	6.68	3.7
交際・付合	0.00	38.28	38.28	18.2	交際・付合	8.72	9.02	0.30	0.2
受診・療養	11.45	18.73	7.28	3.5	受診・療養	20.71	24.25	3.54	2.0
その他	90.18	20.79	-69.39	(33.0)	その他	5.45	15.83	10.38	5.8
一次活動	719.01	664.70	-54.31	(38.8)	一次活動	656.84	658.06	1.22	1.1
二次活動	108.58	248.44	139.86	100.0	二次活動	264.78	311.02	46.24	42.1
介護活動	185.94	179.10	-6.84	(4.9)	介護活動	226.95	117.27	-109.68	(100.0)
三次活動	426.49	347.76	-78.73	(56.3)	三次活動	291.44	353.72	62.28	56.8

(注) 1) 「増減」の数値は、外部からの支援を受けた場合に生じる各種行動の時間数の変化を示したものである。  
 2) 「寄与率」の数値は、増加、減少のそれぞれの場合について算出している。増加の「寄与率」は、増加した各種行動の時間数を総増加時間数で除して100をかけたものである(単位は%)。減少の場合も同様である。

### 政策的含意

夫と妻の場合で、介護の外部支援は異なる効果をもたらしていることが窺える。

介護に当たる夫に対しては、介護の外部支援はかえって家事時間を増加させ、第三次活動(余暇活動)を減少させている。夫に対しては、介護支援に加えて、家事支援を講じる必要があるように思われる。

妻の場合には介護支援は介護負担の軽減という明確な効果を伴っている。追加の介護支援がさらになされれば、妻の介護負担はさらに軽減することが期待される。

ホームヘルパーなどの介助の導入を始め、有効と思われる人的、物的医療資源支援を、財政負担を考慮しながら、効率的に導入することが必要である。

## 6. 本研究から得られた今後の研究の方向性に対する示唆

高齢者夫妻が平穏生活からどちらかが病に倒れることにより介護生活に移行するに伴い、夫妻の生活時間構造にどのような変化が現れるのかに関して、生活時間調査は平均時間量、行為者率という客観的数値をもとに、実に多くの情報を与えてくれる。また、介護が行われる時間帯の情報も、生活時間調査の分析から汲みだせる。これは介護支援需要時間帯に関する情報でもある。

以上のことから、生活時間調査データを用いた生活時間研究は、高齢者夫妻がある段階で必ず迎えることになる老老介護生活、晩秋期の夫妻に関する有効な調査・研究手法であることが理解されよう。

総務省「社会生活基本調査」データを分析した本研究の過程で、介護研究目的に特化した独自の生活時間調査を実施する際に、是非とも組み込んでおくべき調査項目があることが見いだされた。

生活時間調査は外部の支援が介護者の負担軽減に有効であることも示唆していた。しかし、支援の具体的な方法の内容に関しては、「社会生活基本調査」には具体的な調査項目が無かったので、確認することはできなかつた。したがって、介護支援政策立案に資する調査項目を組み込んだ介護研究に特化した生活時間調査を実施することが、研究の次の課題であることが明らかである。

高齢者夫妻世帯の平穏な生活時間構造、また介護が入り込んだ生活時間構造を確認することだけで、生活時間調査・研究の有効性を主張することは十分可能であろう。しかし、老年社会科学の展開のためには、生活時間調査にさらに工夫を凝らして政策情報を汲み取る改善努力が求められている。これを果たしたとき、生活時間研究にさらなる前進と展望が生まれるのである。

## 謝辞

本稿の作成にあたっては、査読者の方々、編集委員会から貴重なコメントを頂いた。記して謝とする。本稿に見出されるかもしれない問題点は、すべて著者の責任に帰すものである。

本稿は2010年日本家政学会（広島大会）、国際生活時間学会（パリ大会）、ソウル国際生活時間カンファレンスにおいて発表した原稿をもとに作成された。そこで得られたコメントも本稿に反映した。

末尾にて恐縮であるが、本研究は島根県立大学学術教育研究特別助成金の援助を得て行われた。

## 注

- 1) 統計数値については、国立社会保障・人口問題研究所（2008）を参照されたい。また、シングル女性の老後と死の不安については、香山リカ（2006）が詳しい。
- 2) 2001年（平成13年）調査において初めてアフターコード形式の調査票が導入され、調査票B調査として調査票A調査とともに並行実施された。



- 3) データの形式は13,588面2行1,370列。1面に1つの世帯情報が記録されている。1行目は夫、2行目は妻のデータで、それぞれ1,370列のレコード数(データの長さ)からなっている。
- 4) (夫:3,100,437世帯+妻:3,088,788世帯) / 2 の計算式によって、309.4万世帯を算出した。夫あるいは妻に付されている世帯乗数値が若干異なるため、母集団数に差が生じている。
- 5) 2000年(平成12年)の国勢調査によれば、世帯総数は4,678.2万、夫妻のみの世帯は883.5万であった。
- 6) sequence approach / sequence analysis と呼ばれ、現在分析手法が生活時間研究者の間で開発されている段階である。
- 7) 時刻別行為者率アプローチのより効果的な分析を可能とした「文字グラフ」を用いた分析は藤原が開発した。
- 8) 生活時間研究の分野で用いられている伝統的な分析手法。
- 9) 介護活動は第二次活動に含まれるが、ここでは判りやすくするために第二次活動から独立させて示している。
- 10) 時刻別行為者率をもとに描かれた折れ線グラフを、波形(リズム)あるいは波高の関係性によって分析する手法については、文献リストに記載の拙稿(藤原 2004)を参照されたい。
- 11) 時刻別行為者率アプローチの適用例および原理に関しては、参考文献に記載の拙稿(藤原 2000, 2001a, 2001b)を参照されたい。
- 12) その他の文字の割り当てについては以下の通りである。  
S: 睡眠、C: 身の回りの用事、E: 食事、M: 通勤・通学、J: 仕事、G: 学業、H: 家事、N: 介護・看護、I: 育児、B: 買い物、D: 移動(通勤・通学を除く)、T: テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、R: 休養・くつろぎ、O: 学習・研究(学業以外)、L: 趣味・娯楽、P: スポーツ、A: ボランティア活動・社会参加活動、K: 交際・付き合い、X: 受診・療養、Z: その他
- 13) 文字グラフにおいて示される各図の左の数値表は、時刻別行為者率である。

## 文献

- 藤原真砂、2000、「行為者率アプローチによる女性の生活時間の変動分析」『アンパイドワーク統計研究会中間報告書』総務庁統計局統計調査部労働力統計課、22-33。
- 、2001a、「時刻別行為者率アプローチの分析論理について——生活時間構造の比較の論理構築を目指して」『北東アジア研究』島根県立大学北東アジア地域研究センター、1: 171-202。
- 、2001b、「生活時間研究における『平均時間』再考」『総合政策論叢』島根県立大学総合政策学会、1: 131-148。
- 、2004、「時刻別行為者率表に対する一般的アプローチをめざして——ライフスタイルの新たな比較手法」『総合政策論叢』島根県立大学総合政策学会、7: 83-97。
- 法務省、2010、「所在不明高齢者に係る戸籍事務について」、法務省ウェブサイト、(2010年11月24日最終確認、[http://www.moj.go.jp/MINJI/minji04\\_00008.html](http://www.moj.go.jp/MINJI/minji04_00008.html))。
- 香山リカ、2006、『老後がこわい』講談社。
- 国立社会保障・人口問題研究所、2008、「『日本の世帯数の将来推計(全国推計)』(2008年3月推計)について」、国立社会保障・人口問題研究所ウェブサイト、(2010年11月24日最終確認、<http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/HPRJ2008/t-page.asp>)。
- 厚生労働省、2010、「平成21年簡易生命表の概況について」、厚生労働省ウェブサイト、(2010年11月24日最終確認、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life09/index.html>)。
- NHK報道局取材班、2010 a、「NHK『無縁社会』三万二千人『死の記録』全公開」『文藝春秋』11月号: 330-345。
- NHK「無縁社会プロジェクト」取材班、2010b、『無縁社会——“無縁死”三万二千人の衝撃』文藝春秋。
- 吉田春樹、2008、『老老介護——その人生学と経済学』PHP研究所。

**キーワード：**老老介護 老老平穏 生活時間 介護 受診 療養 高齢社会  
時刻別行為者率 社会生活基本調査

(FUJIWARA Masago & TAKAHASHI Shota)